

公開講演会記録

武蔵国高麗郡の建郡と渡来人

— 古代の日朝関係について

東洋文化研究会会長 岩下壽之



■はじめに

二〇一六年は武蔵国に高麗郡こまが建郡されてからちょうど一三〇〇年だった。地元の日高市の高麗地域では官民一体のさまざまな催しが行われ、学術シンポジウムなども何度か開かれた。建郡のシンボルとなったのはJR八高線の高麗川駅から徒歩十五分にある高麗神社である。ここには建郡にまつわる高麗しやうらい若光伝説が存在しており、今度の「建郡一三〇〇年記念行事」においても精神的支柱の役割を果たした。

私もこの年は何度か高麗川を訪れ、神社や関連する寺院を見て回り、シンポジウムにも参加した。興味は尽きなかった

が、訪れるたびに、そして文献などを調べると、疑問点もいくつか浮かび上がってきた。謎は二つある。一つはこの時期（七一六年）になぜ東国七か国から一七九人もの高麗人を呼び集めて一郡をつくる必要があったのかということ、初代郡司を務めたという高麗若光なる人物の来歴である。

前者については、数ある高麗郡建郡に関する研究論文でも疑問を差し挟んだものはほとんどなく、ただこの地域の発展を導いたためだいたい出来事という指摘が既成事実化した論調があるのみである。後になって、わずかに一件だけ、推断の部類に入るが、この点に踏み込んだ論文を見つけることができた。推断とはいえず卓見とも言うべき論調で、思わず溜飲が下

がった。これについては後ほど少し丁寧に紹介してみたい。

後者の高麗若光なる人物に関する研究も、ほとんどなされていない。資料が少なすぎて言及が遮られるのである。ただ、高麗神社に残されていた系図などの文書（鎌倉時代に焼失している）と伝説そのものの存在と来歴が語られているだけで、真偽のほどは闇の中である。伝説や伝承は、火のない所に煙は立たずで、むげに否定すべきものではないが、あまりに証拠を欠いているので事実を引き出す決め手がない。「伝承」という言葉でその生涯の大部分を括るしかないのである。

今日のお話も、これら疑問点を提示するのが目的で、その解明を企てたものではない。事実かどうか判然としない事

柄が事実の如くまかり通っていることに注意を喚起し、さらなる究明に役立てたいという一心からのアプローチである。

■高麗郡建郡の詳細

我が国の正史の二番目である『続日本紀』の巻七、靈龜二年（七一六）五月十六日に次のような記事がある。

「駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野、七国の高麗人千七百九十九人を以て、武蔵国に遷す。始めて高麗郡を置く」

『続日本紀』は文武天皇から桓武天皇まで、飛鳥時代後期から奈良時代の終わりまでの九十五年間の事績を記した編年体の史書。事実だけを淡々と述べたある意味では味も素っ気もない書き方をしてゐる。高麗郡建郡に関してもこれ以外は全く言及がなく、事ここに至るまでの経緯や目的などは一切ない。これが前述の謎を呼ぶ原因の一つともなっている。

七一六年といえば平城遷都からわずか六年後である。そうでなくてもこの時期は律令体制の整備が急がれている日本の古代政治の成立期に当たる。遷都に象徴されるようなさまざまな政治改革がいろいろ行われたが、新郡の設置も地方行政

改革の一環であった。高麗郡以外にもいくつかの渡来人集団の郡がつくられた。が、複数の、しかも同じ東国からとはいえ七つもの国から出自を同じくする渡来人を、一か所に集めて建郡した例は他にない。よほど特殊な事情があったと考えざるを得ない。

記事中の「駿河」以下七か国は当時の「五畿七道」の行政区分から言うところ、「下野」以外はすべて東海道に属する。ちなみに武蔵国はまだ東山道の一部で、東海道に移管されるのは奈良時代の後期、七十七年である。「東国」は現在の関東地方とはほぼ重なるが、「甲斐」と「駿河」は「一都六県」から外れる。「上野」が入っていないのは五年前の七十一年にこの地に「多胡郡」ができたせいだろう。「安房国」はこの二年後に上総から分離して建国されるので、まだ存在しない。

「高麗」は高句麗のこと。「こま」と呼ぶのは、後に朝鮮に建国される「高麗」王朝（九一八～一三九二年）と区別するためのわが国の慣例的呼称である。高句麗は五世紀初めの長寿王のとき王朝名を「高麗」と改めたので、中国の歴史書でも「高麗」である。「こうらい」と読むのは後の高麗王朝の場合だけで、高句麗の場合は「高麗」と書いてすべて「こま」と呼ぶ。

新しく高麗郡を置いた地は入間郡の一部で、当時の武蔵国には十九の郡があり、入間郡はほぼ中央に位置する比較的大きな郡だった。今の埼玉県西部に当たり、武蔵国は現在の埼玉県と東京都の大部分を含む地域である。なお、武蔵国は当時東国でも最も開発が遅れたところで、海べりは葦の茂る湿地帯、内陸部は樹木と原野に覆われた丘陵地で人の住めるような場所ではなかった。東海道も武蔵の地は避けて通り、三浦半島先端から浦賀水道（走水）に入って房総半島の上総に抜けていた。つまり途中で海にもぐっていたのである。武蔵国の開発は七世紀の後半から盛んになり、東山道から武蔵国府に通じる「武蔵路」も開通して、発展に拍車がかかった。

このような状況のもと、奈良時代の初め、入間郡に高麗人の寄せ集め集団である高麗郡が成立したのである。建郡に際して、渡来一世である高麗若光は初代郡司として大きな力を発揮したと言われているが、その人物、事績に関しては前述の通り何ら確証がなく、伝承、伝説の形で一〇〇〇年を超える長期間語り継がれてきたのである。

■激動の七世紀東アジア

高麗若光に関しては、『日本書紀』の「六十六年十月二十六日」条に、列島に來航した高句麗使節団の一員として「二位玄武若光」という名が見える。高句麗が滅亡する二年前である。「二位玄武」が何を意味するかは不明だが、使節団員としての官職名ではないかという説がある。年齢は、七一六年の高麗郡の初代郡司であったという伝承から逆算すると二十歳をいくらかも出ていなかったと思われる。使節団の目的は『日本書紀』は何も記さないが、百濟の完全滅亡から三年後で次は高句麗が狙われている危急存亡のときだったので、大和朝廷への救援依頼であろうという点では識者の見解は一致している。

七世紀というのは、東アジアは激動の時代だった。前半までは朝鮮三国は互いに覇を競っていたが、まず百濟が滅ぼされて脱落、次は高句麗を攻めるべく唐が暗躍、新羅もそれに手を貸そうとしていた。高句麗としてはかつては戦鬪を交えたこともある大和朝廷と手を結んで危機を乗り越えようとしていた。唐は隋朝が果たせなかった宿願の高句麗征討を、国

内をがっちり固めた太宗の後を受けた第三代皇帝高宗のもとで何とか実現させようと図っていた。大和朝廷は唐軍に逆らって白村江で手ひどい打撃を受けただけに、唐軍の報復を恐れて筑紫に水城や大野城を築き、さらに西日本各地に山城をつくって国内防衛施設の構築に汲々としていた。

そんな中で高句麗使節団の來航は大和朝廷にとってはお荷物だったはずだが、使節団をどのように迎え入れたかの記述は一切ない。正使と副使の名前もはっきり書いてあるのでまさか大宰府に留め置いて飛鳥に入京させなかったということはないが、そうであってもおかしくないような状況に朝廷はあった。翌六十七年には天智天皇（まだ称制時代）は近江の大津京に遷都したが、これは琵琶湖の水運で唐からの攻撃を飛鳥よりは防ぎやすいと判断したからとも言われている。六十六年二月には正式に即位して天智天皇となるが、この年の九月、高句麗はついに唐・新羅連合軍によって滅亡させられる。新羅は三国の覇者となったが今度は半島に居座ったままの唐軍の排除に苦勞する。何とか駆逐して統一新羅が成立するのは六十六年である。

高句麗滅亡で唐の脅威は薄れたものの、天智天皇は即位後三年にして薨去、翌六

十七年にはハ壬申の乱Ⅴが勃発する。我が国における古代最大の内乱と言われるハ壬申の乱Ⅴは大海人皇子の勝利で終わり、即位して天武天皇となり、ようやく大和朝廷も盤石の基盤を築くきっかけをつかむ。

「高麗若光」が史上に現れるのは、これよりずっとあと、七〇三年（大宝三）の四月四日になってからである。『続日本紀』の同日に「從五位下高麗若光に王姓を賜う」とあり、史書での「若光」の記述は前記の使節団一員としての來航と、この王姓賜与の二か所だけである。つまり、史実で確かめられる若光の來歴はこの二点だけということになる。

■東国と渡来人

渡来人はかつて「帰化人」と呼ばれた。が、一九六〇年代以降、古代史学者の上田正昭氏の提唱になる「渡来人」という名称が一般化して、今ではこれが定着している。「帰化」とは王の徳を慕って化外の民がその国へ移り住むことで、王化思想の反映である。飛鳥時代までの日本はまだ国家としての体裁は完璧とは言えず、大和朝廷を率いる天皇は「大王」という豪族連合の長にすぎなかったという

のが上田氏の見解である。海を渡って列島にやって来た人たちはなるほど「王の徳」を慕って渡来したわけではない。たまたま海の向こうに暮らしやすい場所を見つけて移って来ただけである。日本海を指す「北つ海」は列島と半島を隔てる壁ではなく、自由に往来できる内海（うちうみ）のようなものだった。

渡来の盛んだった時期は、弥生期の第一期、応神・仁徳期（五世紀前後）の第二期、雄略・欽明期（五世紀後半～六世紀前半）の第三期、七世紀後半の第四期と、四期に分けられるが、ここで問題となるのは第四期である。百済、高句麗の滅亡により、半島からの渡来人が急増した。上は王侯貴族から下は庶民に至るまで、多種多様な人々が亡命や移住の形で海を渡って来た。大和朝廷を中心とした列島の各豪族や民衆も渡来人には至って寛容で、「来る者は拒まず」という雰囲気があった。渡来人の故国である朝鮮半島は当時は列島よりはるかに先を行く文化的な先進国であり、さまざまな知識や技術を有していた。列島に住む「倭人」とっては実にありがたい存在だった。中でも渡来人がもたらした重要なものに、漢字（儒教や仏教の経典として）、製鉄・鍛造の技術、馬の導入と飼育があっ

た。これらは列島に住む倭人たちにとっては革命的な文物だった。その他、灌漑、養蚕、織布、製薬、酒造など、生活手段を格段に進歩させる技術にも長けていた。七世紀後半になると戦乱のために列島にやって来る渡来人が増えたため、大和朝廷は彼らを東国に移配するようになるが、それがまだ開発の遅れていた東国の発展に大きく寄与した。すでに東国は大和朝廷の支配下にあったとはいえないものの、国造の反乱などもあって治安は不十分で、この地が豊かになっていくことは人心の安定にも大きくつながった。さらに北方の陸奥や出羽などで頻発する蝦夷（えみし）の反乱に備える上でも、兵站基地として東国は重要な役割を担った。

渡来人は東国だけでなく列島各地にほとんどくまなく居住し、日本の古代の文化・文明に計り知れない貢献をした。先の上田正昭氏はその著『渡来の古代史』（平成二十五年・角川選書）の中で「多くの研究者は『渡来人の影響』というが、それはたんなる影響にとどまらない。古代の日本の文化そのものの担い手として活躍し、文化の創造にも注目すべき役割を果たしたというべきであろう」と述べている。

■東国の渡来人中心の郡

八世紀に入って律令制度の整備に伴う行政改革の一環として新しい郡をつくる動きが出てきたことは前述したが、渡来人を中心とした郡は東国において特に顕著だった。七十一年には上野国に「多胡郡」、七十六年には武蔵国に「高麗郡」、七五八年には同じく武蔵国に「新羅郡」が誕生した。多胡郡はその名の通り「多くの胡人たちの集まった郡」の意で、「胡人」とはここでは渡来人を指す。なお、「百済郡」は百済が滅びて約二〇年後の六五〇年ごろにはすでに摂津国に成立していたので、ここに古代朝鮮三国の国名を名乗る三つの郡が大和朝廷支配下の列島に存在したことになる。

もともと上野国は渡来人が多く、特に西部には渡来人にまつわる地名や人名が目につく。明らかに朝鮮語から来たと思われる「甘楽（かんらく）」という郡名もあり、この名称は今でも使われている。いつごろから住んでいたかははっきりしないが、七世紀の激動期以前から定住していたことは新羅からの移住者が多いことから窺える。新羅は激動する七世紀の朝鮮半島の最終的な覇者であり、亡命者が出る必

然性はない。にもかかわらず新羅人が多いのは、「北つ海」(日本海)を渡って列島に移住する人々が古来後を絶たなかったからであろう。内乱や飢饉などもあったかもしれないが、新羅人にとっては海の向こうの土地が「外国」とか「異国」とかを意識させないほど自由に往来できる近い存在であったことを物語っている。この傾向は東国よりもむしろ中部地方から西にかけての方が強く、アメノヒボコやツヌガアラシトなど新羅王子の列島への渡来があちこちに伝承として残っている。

旧多胡郡には「多胡碑」があつて、建郡の由来が記されている。「羊」なる人物がこの地の支配を朝廷から任されたらしく、その名前から渡来人だと思われる、特に建てられた石碑の形態(方形の笠石を持つ)から「新羅風」が取り沙汰され、新羅人中心の郡だったことが想定される。ユニークなのは「多胡」とわざわざ銘打ったことで、百済、高句麗、新羅からの渡来人が仲良く共存していた様子が彷彿としてくる。なお、多胡碑は同じ群馬県の西部地区にある「金井沢碑」「山上碑」と並んで、二〇一七年にユネスコの記憶遺産に指定された。石碑そのものは日本には少なく、とくに古代のものは全国で

も十八例しかない。「上野三碑」は中でも最も古いものである。

多胡郡ができたせいで五年後の高麗郡の建郡では上野国からの参加がなかったらしいことは前述したが、片や上野、片や武蔵と国は違えど立て続けの渡来人の郡の設立はやや異常である。しかも多胡郡はその地に住んでいた渡来人たちの集合体であるうが、高麗郡は東国七か国からの高麗人の寄せ集めである。ここが何やら謎めいている。しかも高麗郡は高麗郷と上総郷の二つの郷(郡の下にある行政単位。五〇戸で一郷を成す)しかない小郡で、わざわざ独立させて郡をつくるほどの蓋然性はない。上総郷は上総に住んでいた高麗人が中心で、七か国の中では特別高麗人が多かったのだろう。それにしても、なぜ「七か国」なのか。東国と言っても、甲斐や駿河となれば中心地である下野や上野から見ればかなりの遠方である。

ここから、高麗郡建郡の謎が浮かび上がって来る。謎は先述したように二点。一つはなぜ高句麗滅亡から半世紀近くも経ったこの時期に東国各地から高麗人だけを寄せ集めて一郡をつくらねばならなかったのかという点、もう一つは建郡に功績があり初代郡司を務めたという「高

麗若光」なる人物の真偽を明らかにすることである。この二つはまったく別個の問題ではない。底の部分では通じ合っている。明確な解答があるわけではないが、何が問題なのかを若干の推測を交えて考察し、謎の謎たるゆえんに迫ってみようと思う。

■高麗郡は朝廷の難民対策だった？

神奈川大学経済学会編の『商経論叢』45号(2010年3月31日刊)に河野通明氏の「民具から見た百済・高句麗難民の動向」という論文が載っている。これに出合ったのは「高麗郡建郡一三〇〇年記念」のほとぼりが冷めたころ、二〇一七年の初めだった。前年にはシンポジウムや講演会に出たり、いくつかの論文やエッセイにも接したが、「東国七か国の高麗人を一か所に寄せ集めての建郡」という一大プロジェクトがなぜこの時期に朝廷の手によって行われたのかは不明だった。建郡の意図や動機に触れた論述は皆無で、この企画の壮大だけが独り歩きしていた。バラ色のイメージだけが先行して、その意味を問おうとはしなかったのである。

この河野氏の論文に出合ったのはネッ

トで別の事項を検索中に関連資料に含まれていたからで、発表されてからすでに六年が経過していた。それなのに「一三〇〇年記念」にはこの論説を紹介した記述には全く出合わず、完全に黙殺されていた。このときだけでなく、前記の大学紀要に発表された時点でも話題にはならなかったようである。

河野説の骨子は、高麗郡の建郡は「高句麗滅亡後半世紀を経てもなおくすぶり続ける難民問題をこの機会に一举に解決すべく」(前記論文からの引用、以下同じ)朝廷が打ち出した最終決定策だったというものである。高句麗の滅亡によって列島に渡来した高麗人たちは東国各地に移配されたが、「入植地の自然的・社会的環境にうまく適合できなかった人々」が大勢いて、彼らの不平不満をいかに和らげるかが朝廷の悩みの種だった。高句麗滅亡後間もなく甲斐国には高麗人集団による「巨麻郡」ができているが、この中にも不満分子はいた。東国の他の地域は推して知るべしで、高句麗からの亡命移住者の中になぜ特に不満を持つ者が多かったかは河野氏も言及はしていない。が、これに関しては私は高句麗人独特の民族性が関係していたのではないかと思う。文武に長けた北方遊牧民族の血を引く高句麗

人は、農耕国である韓族の百済や新羅の人々とは違って誇り高い民族であり、世が世なら半島に覇を唱えてもおかしくないという自負があったような気がする。

河野通明氏は古代の農具の専門家で、特に犁や鍬に関してには日中韓の歴史に詳しい。氏によれば、甲斐の巨麻郡の高麗人は渡来後も故国の農具をそのまま使用していたが、武蔵の高麗郡の人々にはその痕跡は見出せない。故国が滅亡して半世紀近く経っているので高麗郡成立に伴う移住者はすでに二世三世のほぼ日本人化した人々と考えられるが、彼らは父祖伝来の農具ではなく土着の倭人と同じ犁や鍬を使っていた。つまり一世の高麗人は渡来した時点ですでに伝統的な生活様式を捨て去り、列島をさまようディアスポラになってしまっていた。こういう人々が不平不満を抱いて東国各地に点在していたわけである。

朝廷はこの状況の危険性を早くから把握していたが、対策を考えているうちにいたずらに時がたって、高句麗滅亡から四十八年後に到ってようやく最終解決策を見出した。半ば賭けのような不安と危惧もあったろう。が、幸いなことには、互いに離れて住むとはいえ東国の高麗人たちには「同国出身の高位者のもとの」

集住願望があった。それを朝廷内部の議政官で北武蔵と縁の深かった阿倍氏や、さらに地元の豪族・文部直や壬生吉志らの協力のもとで実行に移した。集住願望には「列島内にかつての高句麗王国を！」という再興への夢もあったかもしれない。折も折、彼らの間には七〇三年に王姓を賜与されていた「高麗王若光」という半ば神格化された人物がいた。東国だけでなく、「高麗王若光」の名前は全国の高麗人の間で知らぬ者はなかった。

■高麗王若光の伝承

神奈川県西部に大磯という町がある。ここには「高麗山」があり、「高麗」という町域名がある。「高麗神社」もあったが、これは明治になって「高来神社」と改称されたが音読みでは「こうらい」である。高麗寺もかつてはあった。大磯は「湘南」という地名の発祥地であり、モダンな避暑地、海水浴場としてのイメージが強いが、この地には「高麗」がふんだんにある。

実は大磯は高麗王若光と深い関わりのある地なのである。奈良時代の初め、この地に船でやって来た高麗人たちが一時滞在したという伝承がある。この話は

磯名物の夏祭り「御船祭り」で木遣り唄となつて語り継がれている。船上の翁は自らを「高麗国」から来た守護だと名乗り、後に高麗神社に権現として祀られる運命を集まった漁民たちに予言する。高麗山の頂にはかつて高麗権現を祀る社があったが、荒廃して今では麓の「高来神社」に遷されている。神宮寺として高麗寺もあったが、これは明治期に廃寺となっている。

高麗王若光の名前はないものの、渡来人がこの地に上陸したという事実はこの伝承からほぼ間違いないと言える。加えて「高麗」の付く山名や町名の存在。地名は一般に人名に先んじた歴史の真実を明かしてくれる。おそらく高麗王若光の一行は奈良時代の初めに大和から陸路伊勢に出て、海路をとって相模に達したのだろう。当時は日本海沿いの北陸や山陰が「北つ海」を渡る主要なルートとして「表日本」の賑わいを見せていたが、太平洋側にも「裏日本」とはいえささやかな沿岸航路はあった。大磯も漁港兼中継港として相模灘の重要拠点だったと考えられる。しかも地名その他から相模の国一帯には渡来人が大勢住んでいたことが確かめられている。高麗王若光が熱烈に歓迎されたのも当地に高麗人が多数居住しており、高麗王若光の名が彼らに知れ

渡っていたからであろう。

この後、高麗王若光の一行は陸路を東に進み、相模川を渡ってから内陸に進路を変え、やがて「高麗郡」となる高麗の地を目指して相模台地、武蔵野台地を一直線に北上したものと思われる。高麗の地に着いたのは建郡の四、五年前、七十二年ごろと推定される。初代郡司を務めるとなると、事前にある程度現地の状況をつかんでおく必要があったはずである。高麗郡は台地で水利はよくなかったが、全く未開の原野というわけではなく、少数の在地人や渡来人が開墾しながら細々と暮らしを立てていたはずである。

前述した通り、「若光」に関しては、文字資料としては渡来時の記録、しかも高句麗滅亡二年前の「二位玄武若光」という謎めいた肩書きを持つ『日本書紀』と、七〇三年の「高麗若光に王姓を賜う」という『続日本紀』の二点しかない。藤原宮跡からは「□□若光」（□□は「高麗」説が有力）という木簡も見つかっているが、こちらの方が「若光」の実在を如実に示しているような気がする。あとは伝承、伝説ででき上がった人物像で、真偽のほどは定かではない。が、JR八高線の「高麗川」駅で降りて高麗神社を訪ねると、高麗王若光は実在したと信じ

たくなるから不思議である。没後は高麗神社の祭神になったそうだが、代々の宮司は「高麗氏」を名乗り、現在で六十代目というのも何やらいわくあり気である。（2018年12月13日・公開フォーラム）

筆者略歴（いわした としゆき）

1939年大阪府豊中市生まれ。幼年期を中国・大連市で、少年期を長野県佐久市で送る。東京教育大学文学部卒。都立高校教員を経て、2000年から5年間、中国の大学で日本語教師を務める。

主な著書

・『大連だより——昭和十六〜十八年・母の手紙』（1995年）、『大連・桃源台の家——昭和十九〜二十年』（1997年）、『大連を遠く離れて——昭和二十一〜二十三年』（1998年）。以上の〈大連三部作〉で「第17回山室静 佐久文化賞」を受賞。

・〈遣唐使三部作〉『井真成、長安に死す』（2010年・鳥影社）、『円載、海に没す』（2013年・鳥影社）、『定恵、百済人に毒殺さる』（2015年・鳥影社）、『ディアスポラ、高麗への道』（2018年9月・鳥影社）。